

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* ヴィツラ・ファルネジーナを訪れて *

深草 真由子

ローマのテルミニ駅からバスに揺られて 30 分くらいだろうか、トラステーヴェレ地区の入り口にあたるベッリ広場にやってきた。

ローマは相変わらずのカオスである。まだ 6 月とは思えないほど観光客でにぎわっているうえに、あちこちが工事中ときている。来年はカトリックの聖年で、世界中から多くの巡礼者が訪れることになるので、その準備が行われているのだろう。ローマは歩くのが楽しい街だが、この人混みの中、この暑さの中、ときどき腰をおろして休む場所がなければ体力がもたない。

そう思うとトラステーヴェレはほっと一息つけるエリアである。人も車も少ない。一国の首都であることの重みをこれでもかと思せつける立派な建造物に囲まれた中心部に比べると、この地区の街並みは日々の生活を感じさせてくれる。

街路樹が影をつくるテーヴェレ川沿いの大通りを、ユダヤ人学校をこえ、トリルツサ広場を抜け、西へむかって歩く。目的はヴィツラ・ファルネジーナ。たとえ観光客が長蛇の列をつくっていても優先的に入场させてもらえるチケットを数日前にオンラインで予約し(実際はそこまで混雑しておらず、チケットは現地で買えば済んだ)、はるばるここまで来た。実はずっと前からこのヴィツラを見学するチャンスをうかがっていたのだ。

ヴィツラ・ファルネジーナ(ファルネジーナ荘)は、教皇を輩出した名門のファルネーゼ家が所有して

いた屋敷ということで、このように呼ばれている。少しややこしいのだが、ローマにはフランス大使館が入っているパラッツォ・ファルネーゼ(ファルネーゼ館)というのがあるし、さらにはパラッツォ・デッラ・ファルネジーナ(ファルネジーナ館)という建物もあって、これはイタリアの外務省として使われているから、ファルネジーナといえばふつう外務省のことを指す。知名度もこれらの方がずっと上なので、「ヴィツラ・ファルネジーナに行きたい」と言っても「え、なんの用事？」という返事が返ってくるかもしれない。でも、このヴィツラがとにかくすごいのだ。

ヴィツラ・ファルネジーナのもともとの持ち主はファルネーゼではなく、シエーナ出身のアゴ스티ーノ・キージである。教皇庁にも融資していた銀行家で、ローマの街中に居を構えていたが、余暇を過ごすための別荘として、緑豊かなトラステーヴェレにこのヴィツラを建てた。

ユリウス二世、つづいてレオ十世が教皇として君臨し、イタリア各地から集まった芸術家が主にヴァチカン宮殿を舞台に活躍していた頃のことである。キージも自分の新しい別荘に一流の画家たちを招き入れ、フレスコ画で内部を飾らせた。そのなかには、注文主と芸術家という関係をこえ、友情で結ばれることになるラファエッロもいる。彼らの作品によってヴィツラ・ファルネジーナは、ル

ネサンスの時代の人々が抱いていた古代への憧れを体現する場所になった。

ヴィツラの1階の饗宴用の広間には、オウイディウスの『変身物語』のシーンが描かれた一連のルネット(壁の上部の、半月形に区切られた部分)がある。作者はセバステアーノ・デル・ピオンボという画家で、もともとはヴェネツィアで活動していたが、キージに誘われてローマに拠点を移した。デッサンの精密さよりも色の使い方を重視することに特徴があるヴェネツィア派に属しており、ローマの流行とは少し異なる、目新しいスタイルが受けたようだ。この部屋のルネットには、蠟の翼が溶けて墜落してしまうイーカロスなど、空を舞台にした悲劇を描いた。主役はあくまで神話の登場人物だが、なにより印象的だったのはバックの空の澄んだ青色である。

セバステアーノ・デル・ピオンボは同じ部屋の壁に『ポリュペーモス』も描いている。そしてその隣にはラファエッロの『ガラティア』がある。浜辺にたたずむ一つ目の巨人『ポリュペーモス』と、その彼から逃げるように、イルカに導かれて波間をすすむ海のニンフ『ガラティア』——ひとつの物語を二人の画家がそれぞれに表現した作品が左右に並んでいるわけだが、「ここまで来た甲斐があった」と幸せな気分にかけてくれるのは、やはりラファエッロの絵のほうだ(実際、これを目当てにここまで来たのだ)。なにより人物が生き生きとしていて、今にも動き出しそうである。涼しげな潮風が吹いているようすも感じとれるし、海水の匂いがこちらまで漂ってくる気さえする。ガラティアのまとうマントの深い赤色が、目立ちすぎることなく、空と海の淡いブルーに絶妙にマッチしている。

天才と比べられることになって気の毒だとは思いうのだが、セバステアーノ・デル・ピオンボの『ポリュペーモス』のほうは人物や植物の描き方も、全体の色使いも、なんだかいまいちぱつとしない。彼自身もそのことに気づいていて、ラファエッロの才能を妬んでいたのであろう。その後も折に触れ、同じくラファエッロのことを「いけ好かない」と思っていたらしいミケランジェロらと、悪口を言いあっていたようだ(Forcellino, pp. 296-300)。

ヴィツラの北側は、現在ではガラス張りになっ

ているが、もともとは開かれたスペース(ロτζジャ)で、外の庭園とつながっていた。鳥の声や噴水の音も聞こえてきたであろうこの場所の天井には、アプレイウスの『黄金の驢馬』の、クピードーとプシューケーの婚姻の物語が描かれた。アゴスティーノ・キージの二度目の結婚を祝って、ラファエッロとその弟子たちが制作したものである。



【ラファエッロ作『ガラティア』】

キージにはフランチェスカ・オルデアスキという名の美しい女がいた。すでに5人の子どもを授けてくれていた彼女はしかし、平凡なヴェネツィア商人の娘であった。ローマ教皇ともパイプがあり、巨万の富を誇るキージと彼女との結婚は、ステータスの違いを乗り越えた愛の証であり、彼女をローマの上流社会に正式な形で迎え入れるための手続きでもあったのだろう。

ラファエッロたちが天井に描いたのも、ハッピーエンドをむかえる身分違いの大恋愛である。あまりの美貌ゆえ、女神ウェヌスの怒りをかってしまう人間の娘プシューケーと、その娘に恋をする愛の神クピードーは、いくつかの試練を乗り越えたのちに結ばれる。そしてプシューケーは神々の世界へ迎え入れられて、女神になるのである。

息子の結婚を阻もうと画策するウェヌスの少しムツとした表情も、ラファエッロが描くとなぜかとても優美である。しばらく眺めていると夢見心地になってくる。

愛の力がいかに偉大であるかを絵で表現したラファエッロだが、彼自身も近くに住むパン屋の娘にぞっこんで、彼女をこのヴィツラに連れてきていたと言われる。しかしラファエッロは、クピードーとプシューケーの天井画を完成させたのち、1520年に37歳で亡くなった。それとほぼ同時期にアグスティーン・キージも、まだ若い妻を残し、世を去っている。



【ユーノー(右)とケレス(中央)に助けを求めたが断られるウェヌス(左)】

ヴィツラの2階の広間には「教皇がパニックになったのが可笑しい」という旨の落書きがドイツ語で残っている。神聖ローマ皇帝カール五世が派遣したランツクネヒト(ドイツの傭兵軍)による破壊行為を伝える生々しい記録である。1527年に起きたローマ劫掠といわれるこの大事件のあと、ローマ・ルネサンスは夢のように消えてしまった。

ヴィツラでは、当時の画家たちの関心をひきつけていたグロテスク装飾で飾られた通路も見ることができた。それがとてもユニークで面白かったので、その「グロテスクな」図像の出どころである grotta(イタリア語で「洞窟」)——皇帝ネロの黄金宮殿(ドムス・アウレア)——を訪れて、今度は古代ローマ美術に触れてみたいと思っているところである。



【2階「遠近法の間」に残る落書き】

<参考文献>

A. Forcellino, *Raffaello. Una vita felice*, Laterza, 2006.

La Villa Farnesina a Roma, a cura di V. Lapenta e A. Vicenzi, Franco Cosimo Panini, 2019.

Raffaello. La vita, l'arte, l'eredità di un genio, a cura di A. Cerboni Baiardi, Edizioni White Star, 2020.

(元当館スタッフ)

*** イタリア語で長文を読む ***

杉 栄子

仕事柄、「効率の良い外国語の勉強方法」についてよく尋ねられる。効率が良いというのは、今風に言うところのコスパ、タイパがよいもの、つまりお金や時間を出来るだけかけないで効果を感じたいということと思うが、そんな方法があるのかどうか正直わからない。というよりむしろ、大人になってからの外国語の習得には、ある程度のお金、そして特に時間がかかるものと思っている。それに、ある勉強方法が効率的だと思うかどうかの判断は人によって変わるだろうとも思う。

というわけで効率の良い勉強方法は？という質問には残念ながら答えられないが、自身の経験から、効果があったと言える勉強方法ならある。

大学生の頃にイタリア研究会というサークルに所属していて、そこで毎週行われていたイタリア語の勉強会に参加していた。顧問の先生や先輩たちがイタリア語を私たち初心者丁寧に教えてくれ、長文を正確に読む方法もそこで学んだ。それからずっとその方法を使いながら、イタリア語でいろいろと読んでいます。おかげで読解力がついたし、たくさん読んだので語彙数も増えたと思う。効率的かどうかはわからないが、効果は大いに実感しているので、その読み方を紹介したい。と言っても特別な方法でもなんでもなく、ある程度のレベルに達している人には分かりきった内容だが、これからイタリア語で長文を読んでみようという人の参考になればと思う。

まず作業をしやすくするための準備として、読みたいイタリア語本文をノートに書き写す。イタリア語の行間は3行開ける。開けた余白部分には単語それぞれの品詞や意味を書き込む。具体例がある方が分かりやすいと思うので、第56回実用イタリア語検定4級の長文問題の冒頭をお借りしてご説明しよう。

(<https://www.iken.gr.jp/56screen/4SCR/4S-N56.html>)

È stato creato nel 1959, dall'artista
 動 creare in+il da+l' 名 f.s.
 受動態 直近 3s 芸術家
 創る

Maria Perego e la sua prima voce
 接 所形 形 primo 名 f.s.
 suo f.s. 声
 f.s. 最初の

è stata quella di Domenico Modugno,
 動 essere 代 f.s. 前
 直近 3s それ ~の
 ~である

il famoso interprete della canzone "Volare".
 形 m.s. 名 m.s. di+la 名 f.s.
 有名な 演者 歌

書き込んでいる内容について具体的に見ていこう。

余白1行目にはまず品詞を書く。品詞は□で囲む。動詞、名詞、接続詞、形容詞、代名詞、前置詞など。これは書き込む作業を楽にするために頭文字だけ書いて囲っているだけなので、□でも○でもいいし、自分がわかるのなら囲む必要もない。品詞がわかれば、その役割もわかってくる。形容詞なら名詞を修飾しているし、副詞なら名詞以外の何かを修飾している。代名詞は何らかの名詞の代わりをしている、といった具合である。

この文章は動詞で始まっている。動詞については、辞書に載っている原形、活用形の詳細、そして意味を書く。

動詞の活用形は4つの要素で確定することが出来る。その4つとは、以下の通りである。

- ・法(直説法、接続法、条件法、命令法)
- ・時制(現在、未来、先立未来、近過去、半過去、大過去、遠過去、先立過去)
- ・人称(1、2、3)
- ・数(s.=単数、pl.=複数)

冒頭の È stato creato は、動詞 creare の受動態で、直説法近過去3人称単数。意味は「それは

創られた」。イタリア語はよく主語を省略する言語で、動詞の活用形から主語がわかることが多いが、この場合は文章の冒頭で、主語が明示されていないので、主語が何かわからない。過去分詞が男性形であることから、男性名詞単数形のもの主語だろうと見当をつけつつ、続きを読む。

次の nel は前置詞 in と定冠詞 il の結合形。西暦と組み合わせて「～年に」と言う時に使う。その次にある前置詞 da は、受動態の文章で使われる場合、動詞の動作主を示している。

その動作主は名詞 artista である。名詞や形容詞には性数の区別があるので、それをアルファベットで書く。(日本語で「男単」とか「女複」とか書いてもいいが、画数が多くて面倒なので私はアルファベットで表記している)

m.=maschile 男性 / f.=femminile 女性
s.=singolare 単数 / pl.=plurale 複数

artista は男女同形の名詞であるので、性に関しては前後の要素から判断する。ここでは Maria という名前から女性であることがわかる。というわけでここまでを訳すと「それは 1959 年に、芸術家マリア・ペレゴによって創られた」となる。

sua は「その」という意味の所有形容詞で女性単数形、次の形容詞 prima も女性単数形であるので、両方とも女性単数形の名詞 voce を修飾していることがわかる。「その最初の声」という意味であるが、「それ」とは誰のことだろう。おそらく 1959 年に創られた「それ」である。

ちなみに形容詞は男性単数形で辞書に掲載されている。だから sua をそのまま調べても見つからず、一旦男性形の suo に変えて調べる必要がある。一方 prima はちょっとややこしい。というのも、副詞、前置詞、名詞としての prima という単語が存在するので、そのままの形で調べても辞書に載っているのだ。実はそのどれでもなく、形容詞 primo の女性形である。

イタリア語は、辞書に載っている形から変化した形で使用するケースが結構ある。最初はすぐに見分けられないもので、私も品詞を間違っただけで、文法におかしいのに力づくで訳そうとして、変な意味の文章が出来上がるということがよくあった。だから何か意味がしっくりこない…と思った

ら、自分の理解がどこかで間違っているサインである。ともかく、イタリア語をある程度読み慣れてくれば品詞の見当がつくようになるので、最初は間違っても気にせず読み続けてほしい。

次の è stata は動詞 essere の直説法近過去3人称単数。過去分詞の語尾が女性単数形なので、主語は voce であることがわかる。次の代名詞 quella も女性単数の形をしているので、voceを指している。というわけで2、3行目は「その最初の声はドメニコ・モドゥーニョのそれ(=声)であった」という意味である。

4行目はドメニコ・モドゥーニョの説明である。形容詞 famoso は男性単数形で、次の名詞 interprete を修飾している。interprete も男女同形の名詞であるが、前に男性形の定冠詞 il があること、形容詞が男性形であることから、男性名詞だと判断できる。最後の“Volare”は世界的に有名になった歌のタイトルである。日本ではジブシー・キングスが歌うバージョンの方が知られていると思う。というわけで4行目は「ヴォラーレの有名な歌手」という意味になる。

ひとつ目の文はここまでで、意味をまとめて訳すと「それは 1959 年に、芸術家マリア・ペレゴによって創り出された。そして、その最初の声は、ヴォラーレの有名な歌手ドメニコ・モドゥーニョの声であった」となる。「それ」が何なのかはまだわからないので、続きを見ていこう。

Chi è? Topo Gigio, naturalmente.
 疑 動 essere 名 m.s. 副 もちろん
 m.s. ねずみ
 誰 直現 3s

Il topolino italiano più famoso
 定 名 m.s. 形 m.s. 副 形 m.s.
 topo の〇小 イタリアの 有名な
 小さいねずみ 最上級

nel mondo!
 in+il 名 m.s. 世界

Chi は疑問詞、次の動詞 essere が直説法現在3人称単数の活用なので、主語はここまで不明なままの「それ」である。次の Topo は男性名詞単数

形で「ねずみ」という意味だが、ここではそのまま「トーポ・ジージョ」とする方がいいだろう。日本では「トッポ・ジージョ」として知られている、あのねずみのキャラクターだ。というわけで「それって誰のこと？もちろん、トーポ・ジージョだ」と「それ」がここで明らかになる。トーポ・ジージョの文には動詞がないが、こういう場合は essere が省略されていると考えれば大抵うまくいく。

さて、最後の文である。名詞の *topolino* を辞書で引くと、*topo* の *o* 小と書いてある。これは、名詞 *topo* の後ろに縮小辞「*-ino*」がついた形ということである。それなら *topino* じゃないかと思うところで、実際、*topino* という形もある。本物の動物としての小さなねずみを指す場合は *topino*、トーポ・ジージョのようなキャラクターを指す場合は *topolino* を使っているようだ。その証拠にミッキーマウスもイタリアでは *topolino* と呼ばれている。ちなみに *topino* も *topolino* も辞書に載っているが、もし語尾が *-ino* で終わっていて辞書に載っていない単語に遭遇した場合は、その語尾を取り去った形で探してみるといい。

次の形容詞 *italiano* は男性単数形で *topolino* を修飾している。その後ろには比較級を作る副詞 *più* と形容詞 *famoso* があり、<定冠詞+名詞+*più*+形容詞>の形をしている。つまりこの文は相対最上級である。比較の範囲は *nel mondo* で示されており、「世界で最も有名なイタリアのネズミ君だ！」という風に訳せる。

以上が私が普段やっているイタリア語長文の読み方である。まとめると

- ・品詞をおさえること
- ・名詞、形容詞は性数の区別をすること
- ・動詞の活用を明らかにすること

これらが基本であるが、これらのことをするためには辞書をまめに引く必要がある。知っていると思う単語でも、文章の意味がしっくりこない時は、その単語が別の意味で使用されているのかもしれないし、品詞を取り間違えているのかもしれないし、前後の単語と組み合わせた特別な言い回しがあるかもしれないからである。

今回はイタリア語検定4級の長文を例にしたので、そこまで難しい文章ではなかった。動詞も直

説法現在と近過去のみでの活用だ。これが3級になると関係代名詞や接続詞が出てきて、文章が複雑で重層的になる。何が主語なのか一目では分かりづらくなっていくので、動詞の活用を明らかにすることがますます重要になる。

また、定冠詞や単独の前置詞など見れば明らかにわかるものや、自分が確実に覚えている単語などは書き込む項目を省略すればよいと思う。読み慣れて語彙も増えてくれば、書き込む内容はさらに減り、読むスピードはどんどん早くなる。

ちなみに現在私は授業でこれらの本を受講生の皆さんと読んでいます。



イタリア語を上達させるための勉強法として紹介したけれど、イタリア語で色々読めるようになると楽しいですよ。

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaiikan.jp
URL: <http://italiakaiikan.jp/>